平成22年11月19日
国語科　嘉登　隆

3年自由選択科目「古典講読」特別授業

「朗読と音で親しむ古典の世界」実施要項（案）

1　目　的

（1）古典（『源氏物語』）をモチーフにした、現代作家の手になる作品の朗読を通して、古典に親しもうとする態度を育てる。

（2）雅楽の体験授業を通して、日本の伝統文化やそれを継承する人（雅楽奏者）とふれあい、自分の世界を広げる。

2　日　時　　平成22年11月25日（木）　5・6校時　　13:25~15:30

3　場　所　　5校時　　図書室（A棟2階）
　　6校時　　音楽室（C棟3階）

4　対　象　　3年自由選択科目「古典講読」受講生徒29名（含社会人聴講生1名）

5　講　師　　朗読俳優　　木名瀬　五百子　氏
　　雅楽奏者　　中西知正氏ほか2名

6　内　容

第1部　民話の語りと朗読の楽しみ

1　学校司書によるブックトーク（プリント教材）

2　講師による民話の語り（20分）

3　現代語訳による『源氏物語』（賢木）の朗読ワークショップ

第2部　雅楽の体験授業

1　講師による雅楽概説（プリント資料）
　※雅楽で使用される楽器（龍笛、篳篥、笙など）体験

2　講師による演奏

7　その他

（1）使用物品　　ホワイトボード

（2）本授業は「神奈川県平成22年度読書活動充実プログラム」の一環として企画したものであり、学校司書との連携・協働により行うものである。

古典の世界に親しむ

このプログラムは「県H22年度読書活動充実プログラム」の
一環として企画されたものです
お時間のある方はどうぞご参加ください

日時　2010年11月25日(木)　５－６校時

３年選択「古典講読」時間中

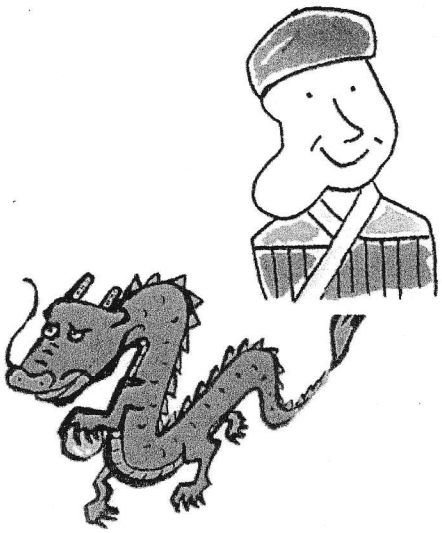
A 民話の語りと朗読の楽しみ

＜演者プロフィール＞

[redacted]([redacted])氏
大地の劇場・東京民話街所属。
主に東北の方言による昔話の語りを
得意とする。
相模原市内の小中学校、老人会などで
民話を語る。
相模原市[redacted]在住。

＜演目＞

「こぶとり爺」　原話　宇治拾遺物語
「びわ池」　長野県の民話



＊[redacted]氏の語りの後、生徒が源氏物語の朗読に挑戦します

B 音から親しむ古典の世界－雅楽の演奏

＜演者プロフィール＞

普段はそれぞれの仕事や勉学と両立をはかりながら
雅楽を学んでいる方々です。
高校生に年齢が近い大学生も多いそうです。
雅楽がより身近に感じられると
いいですね!

古典講読　三年　組　番　氏名

京都古典文学案内　嵯峨野　野宮神社

〜『源氏物語』を読んだ作家たち〜

与謝野晶子　『源氏物語』（角川文庫）

町を離れて広い野に出た時から、源氏は身にしむものを覚えた。もう秋草の花は皆、衰えてしまって、かれがれに鳴く虫の声と松風の音が混じり合い、その中をよく耳を澄ましさないでは聞かれないほどの楽音が野の宮の方から流れて来るのであった。艶な趣である。

野の宮は簡単な小柴垣を大垣にして連ねた質素な構えである。丸木の鳥居などはさすがに神々しくて、なんとなく神の奉仕者以外の者を恥ずかしく思わせた。神官らしい男たちがあちらこちらに何人かついて、咳をしたり、立ち話をしたりしている様子なども、他の場所に見られぬ光景であった。

谷崎潤一郎　『源氏物語』（中央公論社　昭二十六）

広々とした嵯峨野を分けてお入りになりますと、もう何となくものあはれなのです。秋の花は皆しおれて、浅茅が原もさびしく、うら枯れています中を、鳴き細る虫の音に、松風がすごく吹き合わせて、何の琴とも聞き分けられぬほどに、ものの音色のたえだえに伝わってきますのが、言いようもなく艶なのです。

わびしそうな小柴垣を外回りにして、板屋がここかしこに立っていますのが、ほんの仮普請のようなのです。黒木の鳥居ともは、さすがに神々しく見渡されて、自然と襟を正したくなる気色なのですが、神官たちがあちらこちらで咳払いをしながら互いに何事か語り合っている気配なども、他とは様子が変わって見えるのです。

円地文子　『源氏物語』（新潮文庫）

はるばると広い嵯峨野に分け入り給ふと、はや、ものあわれな風情が一面に漂っている。秋の花はみなしおれて、浅茅が原も枯れ枯れにさびしく、弱々しくすだく虫の音に、松風のすごく吹き添うなかを、何の音とも聞き分けられぬほど、たえだえに楽の音色の聞こえてくるのが、えも言わずなまめかしい。

形ばかりの小柴垣を外囲いにして、あちらこちらの板屋の見えるほんとうの仮普請である。黒木の鳥居がいくつかあるのは、さすがに神々しく見渡されて、そぞろに気後れする有様であるのに、神官たちがあちらこちらで咳ばらいして、仲間だけで話し合っているのなど、よそとは変わった風情に見える。

田辺聖子　『新源氏物語』（新潮文庫）

源氏が広々とした嵯峨野に分け入ると、秋のあわれは野に満ちていた。花はすでに散り失せ、浅茅の原も枯れ枯れに、とだえがちの虫の音、松風の音も荒々しい。

その中を、野の宮の方から風に乗ってきれぎれに、楽の音色が聞こえてくるのは、やさしい風趣があった。

野の宮は、はかない小柴垣を囲いにして板葺の家があちこちに建っている。黒木の鳥居も神々しく、神官たちがたむろして、咳払いをしたり、話し合ったりしているさまも、神域らしい、よそとは全く違う趣である。

橋本治　『蓁菱　源氏物語』（中央公論社）

野の宮は夕霧の中にあった。

平原の果てに上弦の細い月は既にうっすらと形を見せて、九月の七日を過ぎれば、都を離れた嵯峨野の地には秋草の色香もなかった。咲き終えて枯れしぼんだ草花に対し葬送の曲を奏でるように、茅萱の原では虫たちが忍び音をもらし、さえぎるものなく吹き渡る松風の向こうからは、霧を分けて微かに琴の音と聞き知らせる響きが切れ切れに渡ってきた。

高く伸びた松林がいささか透切れた辺りに、霧を分けて黒い家陰が姿を現した。かすかに輝く火影は日々の神饌を調ずる火焚屋の竈の光でもあろう。松林を背に、潔さの匂う小柴垣を外囲いの大垣として結い渡した板屋の群れが霧の底から浮かび出た。

中央に立ちはだかる黒木の鳥居は、その無骨な樹皮の間にいまだ野の匂いを留め、暗い神々しさで辺りを律していた。庭にたたずむ白丁姿の神官たちは、時々低く咳払いの声を聞かせては、交互に何事か話し合ってはいたが、私たちの行列が近づくにつれて、それを止めた。神官たちの表情は貧しく、無感動に私たちを見ている。「ここが野の宮か」と思う。

黒々とした板屋葺きの殿舎の群れは、普段、見慣れた邸の建物よりはずっと小振りで、神寂びるとはこのことかと思われた。

※本文はいずれも途中省略されている。また、朗読しやすいように読点をほどこし、表記も改めた。